

大阪工業大学工学部 学生員 ○三國 宣仁

大阪工業大学工学部 正会員 岩崎 義一

1. はじめに

一般的な見解として、大坂は商人のまち、江戸は武家のまちとして形成され、その後も現在に至るまで大坂は商業のまちとして発展してきたといわれる⁶⁾。また、様々な資料によると大阪市街地は「秀吉がつくったまち大坂」と位置付けられようが、そのためには秀吉の都市造営のコンセプトと当時の市街地が現在までの市街地形成に如何なる影響を与えてきているかについて明らかにする必要がある。本研究は彼の執った政策を「移住」・「配置」・「促進」の面から整理し、市街地形成過程のメルクマール、現市街地への投影を確認することによって執政における一貫した合理性を検証して、秀吉の都市形成アイデンティティーについて明らかにするための研究作業を見定めようとするものである。

2. 秀吉による都市「大坂」造営²²⁾²⁴⁾

天正 11 年大徳寺で信長の一周忌の法要を済ませた秀吉は、9 月石山寺内を再利用して大坂城の築城に着手する¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾⁷⁾¹⁴⁾。石山合戦で証明された要塞性に加えて水陸交通の要衝であった大坂は、戦略的合理性から見て天下統一を目指す秀吉にとって恰好の場所であった¹⁾。

大坂の市街地は大坂城築城以前より始まっており、それは城と南の四天王寺をつなぐ街道沿いに線状に町を建設し、さらに住吉を経て貿易港・堺にまで達するという構想であった¹⁾⁴⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹⁵⁾¹⁷⁾。当初秀吉の大坂市街地構想はイエズス会の報告や国内記録によると、(1)大坂城の築城、(2)諸大名屋敷の建設、(3)内裏の移転、(4)五山並びに都の主要な寺院の移転、(5)セミナリヨ(神学校)の建設、(6)繁栄する巨大な市の建設等であった⁵⁾。京都の内裏を大坂(天満)に移転するといった遷都構想までもった大都市計画であった²⁾⁵⁾¹⁸⁾。

秀吉の大坂市街地の建設は大きく 2 つの期間に分けられる。第 1 期は大坂城築城と主として上町・玉造と平野で進められた城下の建設、そして都市としての天満の建設である。第 2 期は秀吉の晩年、慶長 3 年(1598)に始まる三の丸建設と船場の開発である²⁾。

3. 秀吉の都市造営コンセプトの整理項目²²⁾²⁴⁾

3-1. 移住

(1)平野郷の町人：中世より堺と並んで発展を遂げていた平野郷から、大坂城築城頃に秀吉は富裕町人を強制移住させた¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾¹¹⁾²⁴⁾。

(2)本願寺：石山本願寺開城後、紀州鷲森や和泉貝塚などを転々としていた本願寺を天正 13 年(1583)に秀吉は天満に誘致した¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾¹⁸⁾。

(3)三の丸建設・船場の整備：慶長 3 年(1598)秀吉は大坂城三の丸の築造に着手し、それに伴い大名屋敷の移転を施行し、同時期に船場の開発が行われた²⁾⁴⁾⁵⁾⁹⁾¹²⁾¹⁶⁾¹⁹⁾²⁴⁾²⁵⁾。

3-2. 配置

(1)平野郷の町人：当時の大坂市街地の上町の南と玉造の間付近に街道の始点を置くと、そこから上町を経て北に行くところと京街道に通じており、また東に行くところと奈良街道にも通じていた。そして南は四天王寺を経て堺にまで続く熊野街道があった。秀吉はこの街道の結合点(上町・玉造付近)を大坂の主要地として経済的発達を促そうと企図したのであろう。

古代から大坂の地には大坂城が建設された付近を頂部として南北に帯びた上町台地があった。この台地は北が高く南が低い形で、また西側は急斜面で東側はなだらかな傾斜面となっていた⁷⁾。秀吉はこの地形を大きく変えることなく、大坂城頂部を中心として、丘陵に沿った形での市街地の南への拡張を進めていった¹⁰⁾。

中世から石山本願寺寺内と四天王寺境内は大坂の 2 大都市として存在しており、秀吉はこの 2 大都市を大坂の市街地構想に取り込むため²⁾、また堺にまで都市を形成するための足がかりとして平野郷の町人を移転させたと考えられる¹⁾。

(2)本願寺：秀吉の市街地構想は上町・玉造だけに止まらず、大坂城から大川を挟んで天満の地にも展開した¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾¹⁸⁾。先にも述べたようにこの地に内裏を移転し、それに伴い京都の公家・商人・職人を移住させてこの地を首都とするという

秀吉の遷都構想であったのであるが、内裏の移転は頓挫したのでそれに代わって天満東寺町の南、天満天神の東の土地（東西7町・南北5町）を本願寺に与え、天満本願寺を建設させた¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾¹⁸⁾。

秀吉は天満本願寺建設にあたって堀や土居などの要塞施設の構築は一切許さず¹⁾、本願寺を大川を隔てた膝元において監視した。

そして天満本願寺寺内を建設することによって天満の地を一挙に開放し、さらに全国から参詣者を吸引する本願寺を利用して大坂の都市的開発を行った¹⁾。

(3)三の丸建設・船場の整備：慶長元年(1596)の閏7月13日、畿内において大地震が発生した¹²⁾。この地震により壊滅的な打撃を受けた堺は大坂の外港としての機能を失い、秀吉は新たな大坂の外港として船場の開発を進める¹²⁾。この同時期に秀吉は秀頼保護のために三の丸を築造し¹²⁾、これに伴い1万7千戸もの商工業者の屋敷を強制的に移転させ、三の丸内に伏見から大名屋敷を移し、「大名町中屋敷替」と呼ばれる市街の大改造を実施した²⁾⁴⁾⁵⁾⁹⁾¹²⁾¹⁶⁾¹⁹⁾²⁴⁾²⁵⁾。

3-3. 促進

(1)平野郷の町人：秀吉によって形成された平野町は地形的にも優れており、南北に伸びる上町台地頂部の平坦面に沿って形成された⁴⁾⁵⁾¹¹⁾。また平野町の町割は町人地として土地利用が合理的に行えるものであった⁵⁾²⁴⁾。しかし大坂城築城以前から自治都市として栄えていた平野郷の町人³⁾にすれば、大坂に移住することは抵抗があったであろう。秀吉がそれでも彼らを移住させるには、何らかの政策があったと考えるのが妥当である。屋敷地提供のための町割はもちろん、税の優遇もあったのではないかとと思われる。

既存の地形や蓄積を巧みに利用しつつ石山寺内と四天王寺境内を平野の町人町で結ぶという手法は経済的発達を促し、まさに都市的合理性を重視した市街地形成であった。

(2)本願寺：秀吉は天満本願寺を利用して大坂の都市的開発を促進する一方、天満本願寺寺内に寺内掟と検地を施行し²⁴⁾、本願寺の内部解体を始めた¹⁾。これにより従来の寺内町の形であった寺院と町の経済的有機性のある関係が分断され、辛うじて地子得分権だけが残された¹⁾²³⁾。このように本願寺は秀吉という為政者の支配下で中世的寺内から近世的寺内へと再編され、都市の城塞性、寺院と町の関係、寺内の町割などは大きく変質した¹⁾。しかしこれらから秀吉の企図を考えると、従来のような閉ざされた寺内町を開放し、周辺の住人や他の寺内町とも連関させ、より経済的発展を促し、都市的合理性を重視した市街地を形成させるためのものであったと思われる。

(3)三の丸建設・船場の整備：晩年の秀吉が施工した三の丸の建設はこれまでの地形的制約を超えたものであり、これまでの市街地形成を一変させるものであった²⁾⁴⁾⁵⁾¹⁰⁾¹²⁾¹⁶⁾¹⁹⁾。大名屋敷を三の丸内に移転させ¹⁰⁾¹⁶⁾¹⁹⁾²⁴⁾、逆に商人や職人を三の丸外へ移転させた²⁾⁴⁾⁵⁾。これら商人や職人の移転先が東横堀以西の船場で²⁾⁴⁾⁵⁾²⁴⁾、この船場の開発における秀吉の意図は新たな大坂の外港として大阪湾まで町を延ばそうしと考えられる¹²⁾²⁴⁾。三の丸の建設と船場の開発により、市街地はこれまでの南北だけでなく東西にものびる地形に変容していった²⁾¹⁰⁾。秀吉の強い意志のもとに造られた当時の大坂市街地の人口は20万人といわれており²¹⁾²²⁾、他の市街地と比較すると非常に大きな市街地である。それは恐らく西国全体の商人・職人層を見通し、どこに誰をいかにして連れてくるかという政策があったと思われる²¹⁾。秀吉の三の丸建設の最も大きな企図は自分の死後も含めた大坂の防御であるが、三の丸建設と船場の開発における秀吉の企図を総じて洞察すると、これまでよりも戦略的合理性を重視したものの、都市的合理性を十分考慮した市街地形成であったと見定めることができる。

4. 研究方針（まとめにかえて）

移住については都市の構成要素として存立、活動しうる要件を事実関係から検証すべきであろうから、この3地区の移住元と移住先の間の雇用、生業などの変化の特徴や関わりについて明らかにする必要がある。

配置については周辺都市との接続や大坂市街地の都市軸の形成と要塞装備などについて検証すべきであろうから、この3地区の地域・地点の背景と理由について知る必要がある。

促進については都市発展のメカニズムを具現化し、装置としての都市街区機能を結びつける制度・仕組みなどについてさらに検証していく必要がある。したがってこの3地区の経済・宗教・行政面における制度・仕組みをシステムの的に捉え、明らかにする必要がある。

【参考文献】

- 1)「図集 日本都市史」高橋康夫他 東京大学出版会 p14 2)同 p132,133 3)「千年都市大阪 まちづくり物語」岩本康男他 凸版印刷株式会社 p20 4)同 p24 5)同 p26,27 6)同 p48,49 7)「都市空間 中世都市空間1」(大坂城下町にみる都市の中心と周縁) 鶴柄俊夫 中世都市研究会 p51 8)同 p52 9)同 p54 10)同 p59 11)同 p73 12)同 p75 13)同 p76 14)「『中世』から『近世』へ」(中世都市から近世都市へ—大坂城下町成立の意義—) 佐久間貴士 名著出版 p76 15)同 p85 16)同 p86 17)同 p87 18)同 p89 19)同 p90 20)同 p91 21)同 p92 22)「大阪府史 第4巻、第5巻」大阪府史編集専門委員会 大阪府 23)「大阪建設史夜話」玉置豊次郎 大阪都市協会 24)「よみがえる中世」佐久間貴士 平凡社 25)「随想大阪繁盛録」宮本又次 文獻出版